

どんな難問にも答えられる笑顔の実践医師

美馬達夫・医師

授業の前夜、ゆき先生からの資料を読んで「医学部の1年先輩のあの中村先生」が、こんなすごい仕事をしているのだ！と驚きました。笑顔が素敵で優しかった中村先生は、45年後の「邂逅」でも、「お人柄が顔ににじみ出た」笑顔の人でした。

私は、母子手帳が日本発であったことも知らず、母子の健康を守る上でいかに役立つものであるかを改めて認識しました。これが世界中に広がっていくきっかけを中村先生は作ったのですね。

インタビュー記事『日本の母子手帳が世界の親子を守る』で、インドネシアで母子手帳を作るにあたり先生が心がけた3つのことには感服しました

①日本の母子手帳の翻訳にはしない、②インドネシアで使っていたものを出来る限り使う、③小さいモデル地域から始め、一つのところで凝り固まってベストを作るのではなく、ちょっと良いものが出来たらどんどん広げていく「10年経ったら全国制覇」の進め方。著作権フリーにして普及を第一義としたこと、まずは保健ボランティアに母子手帳の使い方を指導し良さを知ってもらい住民に広めてもらったことも含め、なんと優れた実践でしょう。

予習で既に感動してしまっていたのですが、講義でさらに多くのことを学びました。母子手帳を1948年に最初に作った厚生省の医系技官だった巷野悟朗先生の話。インドネシアやタイの“厚生省”役人の志の高さと心意気。介護保険制度を日本に学びに来て、その後自国にその制度を作った韓国と台湾の人たちが、自分たちの介護保険の方がずっと優れていると自慢していること（理由は、日本の学者達が日本の制度の問題点を的確に指摘しており、その反省のもとに作られたからだが、日本は未改善のまま！）等々。

今回の授業で私にとっての「目からウロコ」は、日本のプライマリーケアは世界で言うプライマリーケアとは違って、医師会の提言する「かかりつけ医」のようなものではなく、住民が主体となったものが作られるべきである、という先生の発言でした。確かに「かかりつけ医」制度には未来への広がりが感じられず、開業医の利権の再編成が行われるだけのようにも危惧します。プライマリーケアが、医師だけでなく、医療介護の様々な職種はもちろん、例えば農業や建築、はたまた芸術、哲学など他分野の人たちの関わりさえ含む大きな広がりをもつようなものだと思えば始めると、ワクワクします。プライマリーケアそしてヘルスは開発途上国の問題ではなく、私たちこそ、もっと真剣に取りくまなければならない重大事と気づかされました。

「何が中村先生のような稀有な人を作ったのでしょうか？」と私が“変な質問”をした際「一言付け加えると、少数派であり続けようとは思っていました」という最後の言葉も心に残りました。